

きびのつと

NO.59 月刊

第七輯 人物篇 第十号

昭和三十一年五月一日 発行 (非売品)
岡山県都窪郡吉備町東町一三五 呼電四三七 宇垣方
吉備観光協会

宇喜多秀家

宇喜多氏は岡山城の創設者であり、また一時吉備町地域を領有していた郷土史上重要な人物であるので、その事蹟について記述せねばならぬ。元來宇喜多氏の遠祖は往昔大陸から渡來し、鬼島に住した異國人の流北と傳えられ、本姓は三宅氏である。姓氏録に載す處の上代氏族史によれば、三宅姓は太古我國に渡來した新羅族の裔にして、その系統には王族系と國人系とあり三宅氏は王族系である。太古歸化した天日鉾命の後裔の三宅連・橋守、兼井造等のうちの三宅連の末葉である。紀元前朝鮮を征せられた神功皇后もその系統にして、大和朝廷の建國に功勞があつたので天神族ともい早くから連姓を賜わり、皇族別に加えられて居りその三宅姓の流北が鬼島、連島などに土着しこの地方に栄えたのである。(連島の地名は昔三宅連(おき)の領した島であつたのを都西維郡の名が起り、後方に連島と呼び轉じて連(つ)島といふ)。南朝の忠臣鬼島三郎高德は鬼島の三宅姓の家筋にしてその由來については長くなるので省略し、三宅氏略傳を載すこととする。

享保元丙申年(一七二六)以前、大祖天日槍命ト申セシハ新羅國ノ王子ニテ天朝ト一代伊久日入彦尊、在仁天皇(前三三)三年申午三月歸化ナサレテ備前鬼島ニ止マリ、其後播磨赤松(そう)ニ移ラセラレテ七種之宝物ヲ、大和經向ノ内裏ニ献セラル。依是但馬國ニ封セラルハ經向トハ今ノ珠城ノ宮ナリ。夫ヨリ後三十八代青明天皇ノ朝ニアタリ、鬼島ノ地ニ居住セシ三宅連ヲ此倉ノ文字ニ轉セラ。宇喜多、鬼島ノ兩族皆以テ三宅姓也。大祖天日槍命、本朝ニ來ラレシヨリ一千四百十六年ヲ歷テ七十五代崇徳院ノ大治二年丁未二月、百濟國之姫君、後母ノザンニ依テ琴ヲ携ラレ、和歌ヲ詠セラレテ、宇喜多木ニ着岸アリ。此則宇喜多家先祖天日槍命ノ末流、中將實隆公ノ長男少將實能公ニ屬中ナカリシニ依テ、百濟歸化ノ姫君孕王子之時ニ配遇アリテ、平安賀茂ノアタリニテ誕降アリ。是ハ百濟之

子孫ナリ。其右三子三子誕降(是ハ宇喜多少將子孫也)其王子ヲ東御太郎ト申ナリ。東田井地ニ墓所アリ。末弟西御治郎、稗田三郎トテ兄弟三人、鬼島郡一町ヲ三ツに分封セラル。後ニハ右ノ奥方一人宛、隔年三備前ト京師トニ拜ラレシ由、依茲京ノ女郎、或ハ田舎ノ女郎トモ云フ由(以下畧)

とあり。一書に宇喜多氏は鬼島高德の三男、高秀々う出た家系となつてゐる。これは少將實能々々數代後ちに宇喜多氏を嗣いだか、高德の名が高かつたので、なく書いたものと思はれる。高秀々々數代を経て宗家の時代になつて、邑久郡に移住して地方の豪族になつたようである。宇喜多氏にフッては、其他に異説があるが、とにかく大陸民族が歸化した人の後裔であることだけは、ほぼ一致してゐる説である。

宗家の子に久家があり、その子知泉守能家は備前の守護浦上氏に仕え、文明の末期に邑久郡大ケ島の砥石城を據守してゐたが、高取城主島村貫阿彌のために殺された。その子興家は愚昧にして僅かに三百貫の地を領して吉井川の東岸、乙子に小城を築いて退いた。興家は病身にれてその子直家が幼少の頃短命にてこの世を去つたので直家は母と共に福岡村(長船町)に住する母の父に當る阿部定全をたよつて寄食し、或は母の叔母某が西大寺觀音院の尼僧になつてゐるのをたよつて養育されたともいひ、又間として辛酸を嘗めたようである。備前國誌に、宇喜多母子が福岡村に浪流した時阿部定全とつうものが微賤の姿をみて憐み、米錢を與えて養育す。直家が立身して岡山に築城の後、阿部定全を呼んで寄せ、いまの東中島の地を残らず與えてここに住まはせ、子孫は永く福島屋平左衛門といひ、元文の頃まで続いたが、遂に家は絶えたといふ。

かくて逆境のうちには生長した直家は強氣慨心にむえ、旧恩によつて天神山城主浦上宗景に従ふたが自立精神を堅持してゐた。頃は永祿、天正の乱世期にして、その風雲に乘じて活躍し近隣を制覇した幸運鬼である。先づ手始めとして上道郡田浮田村の沼の龜山城主中山備中守信正を滅ぼしてこれに移り、永祿十年には寔兵をもちつて松山城主(高梁)三村修理介元親の大軍を、いまの岡山市の宇野の野に戦つて殲滅的大勝を博し、漸く頭角

をあらうわずに至つた。翌十一年には御津郡の金川城主松田将監元堅を降せんと、その老臣虎倉城主(田守甘村)の伊賀久隆と計り、松田氏の一族戸倉城主(田守垣村)守垣市郎兵衛尉秀成が備中に出張中の苗字を覗い、急に金川城を包圍し、僅かに一晝夜にレテ攻落した(七月五日)。

この守垣市郎兵衛尉秀成にレテ守垣家系譜の一節に(牛姓は松田氏、津高郡守垣村ニ住ス、知行志万三千石、守垣之城主(西山城ト云フ)元成、備前松田元堅討北之時、守垣秀成、備中国知行所巡狩、苗字、金川無勢ヲ宥規ヒ欺キ狩ニ事寄、討レ金川落城後(永禄十一戊辰)守甘庄土倉城江引籠、時節ヲ得所ニ慶長五年庚子、関ヶ原役ニ而、守喜多滅亡ス、慶長八癸卯年民間、落、秀成の子藤左衛門尉、船名梨即物利在、肩背村、須頭山之禁ニ居住、慶長十三戊申年同郡土内村、正本岩、箕輪山之禁ニ居住ス、耕作業營、慶安三庚寅歳没ス、享年九十三、子之達人也、大内邑ニ而守治又十郎ヲ討、御恩賞結ル)とあり。因に元陸軍大將守垣一成はその子孫である。

この市郎兵衛の舎弟に共三右衛門というものがあつた。守喜多氏に降してその臣となり、姓を守神に改め、祿高百五十石を食んで一方の組頭になつた。関ヶ原の役に大敗して其後の消息は不明である。備陽國誌には、松田老臣、守垣市郎兵衛、弟共三右衛門を打取り、金川城を夜討して即時におちゐるとある。

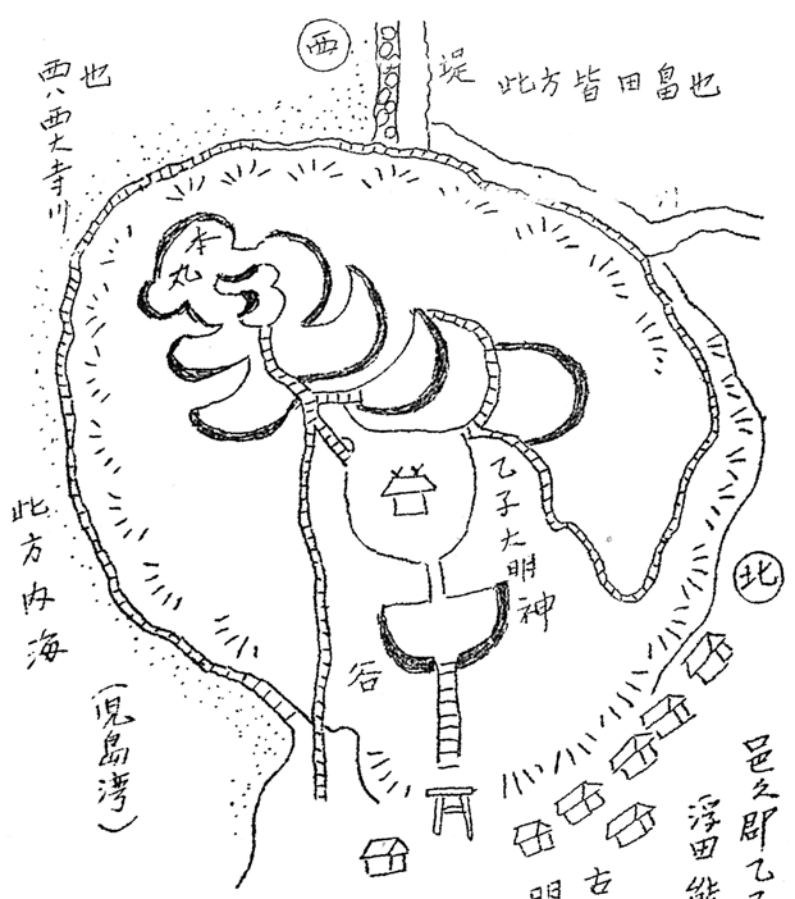
今全談ではあるが、金川(カガワ)の地名にレテ同書に、金川に七曲大明神という社あり「祭神は天照大神、八幡宮、春日大明神」社記に昔此處の領主松田氏、代々尊崇の神なり。松田氏は元來相摸の人なり。相州金川七曲の神社の氏子なり、故、此處に七曲明神を勧請して、その名を以て金川と改めしよし。とある。ソマ相州金川は神奈川の文字を用い、県名になつてゐる。七曲は「ナ、マガリ」と読む。

松田氏は元弘の頃に松田盛朝が北條氏に仕え、守護に任ぜられ、始めて備前の國にきたといふ家柄で、その先祖の有経は藤原秀御より出て相摸の國の松田に住してゐたので、その姓にレたのである。

松田氏系譜
松田有経 — 盛朝 — 元勝 — 元國 — 元高 — 元崇 — 元方 —
相摸松田に住す — 備前守護代 — 岡山蓮昌寺開基 — 富山城築成 — 道隆寺開基 —
藤原秀御の後裔

△ 妙善 — 妙圓 — 蓮基 — 蓮忠 — 淨崇
— 元隆 — 元成 — 元盛 — 元堅 — 元光孫次郎
四山の妙善寺開基 — 金川城に移る。妙圓寺開基 — 金川に討死す — 永禄十一年富山城落城 — 備中須雲山に討死す
文明五年富山城に没す — 文明十六年頼山陽討死す — 下田に討死す — 備中に逃れ毛利氏に仕え其行所不明

さて直家は元龜元年、主君に叛いて浦上宗景を天神山城に攻め、これを屠り備前一國を領した。ここにおいて直家は同三年に中國に威勢を振う毛利氏と攻守盟約を結ぶ。今の龜山城は地形上大軍を動員するに不利なため岡山に移つた。岡山城はもと浦上氏の部将金老共二郎宗高の居城であつたが、これを滅ぼし、その跡を修築して三重五層の天守閣の築城に着手したのである。そして毛利氏との和によつて後顧の憂がなくなつたので、天正七年に美作に働きかけ先づ赤磐郡の周匝の箕部勘右衛門を降し、進んで美作に侵入し、田豊國村の妙見、三星山城主後藤撰津守勝基を陥れ、版圖を拓めた。翌八年には羽柴秀吉の中國討畧に味方して毛利氏と離間し、その嚮導を約した。同九年には兵馬のあつた、最中に直家は不幸にして病にたかり、城中で急逝したが、戦畧上他に洩れることを慮りてその死を秘密にレ、城内に假埋葬したのである。(一説には旭川の下手で下卑なもの、絹衣に包んだ汚物を拾ひ揚げた。これは城中誰れか急病になつて死んだのであろうと噂が流れた。着衣をみれば疑はれることゝなつたといふ)。直家の死は天正九年(一五八二)二月十四日(異説あり)年は五十三歳、痲名はいまの胃潰瘍であつたらしい。戦争篇の高松城水攻の合戦の條で述べたが、直家の屍は、いまの岡山市石瀾町岡山神社の東、いまは廢絶してゐるが、別當殿の天台宗平福院境内に葬送したといふ文獻がある。そので天正の末期に擄索したか、ついに空しく今日まで所在不明である。(平福院は守喜多和泉守直家の廟所にて位牌、木像が安置されてゐたが、廢絶(年代不詳)と共に、磐屋町の柴岡山老珍寺に移され、永く祭られたが、昭和二十年六月廿九日の戦災で惜しくも燒失してしまつた)。



直家の子六郎は其の翌年
十歳で跡目相続となり、
豊臣秀吉に拜謁して元服
し、その偏諱一字を賜は
つて秀家と改め、中国出
陣には初陣して高松城水
攻めに参加した。戦后其功によつて
高松川以東の地、九万石を加増され
た。その右秀吉の出兵毎に大小の戦
には必ず従軍してこれに加はつた。
即ち山崎の役(天正十年、明智老秀を滅ぼす)
賤ヶ岳の役(天正十一年、柴田勝家を滅ぼす)
小牧・長久手の役(天正十二年、徳川家康と交戦
したが、和を結んだ。岡山・主池田氏の先祖信輝が討死した)
根来の役(根来山は紀州那賀郡根来村にある。

新義真言の根本道場である寺域は約四里平方にして、東西に長く、南北に狭く、葛城の山嶺凝りて形成して、
そので「山嶺凝り」ネゴリなる轉訛した地名である。当時社に集めて根来山の僧兵(寺院の私兵で寺領や
莊園を侵襲せんとするものを防衛する目的で僧兵と設けて武装した)は四隣を掠奪し、一時は七十万石を領
し、岩室房閼加井房などの僧兵が一山に跋扈して旗頭となり、秀吉の命に従はなかつたので、天正十三年三
月廿日秀吉は七軍を率いて根来山を包圍攻撃して、ついにこれを陥れて四明院、密嚴院等の堂塔二千七
百有余を悉く焼き拂ってしまった。高野山も百万石を領すると、はれ、秀吉は蘆原せんとしたが、木食上
人應其が、その意に屈して帰順したので、兵燹の凶厄を免れて、一山はこゝろなきを得たのである。)。
四國の役(天正十三年、養子の秀次を遣はして四國の長曾我部元親を降した)。
九州の役(天正十四年から十六年に亘つて島津義久を戦はせしめて諸国を合して和を結んだ)。
朝鮮の役(文禄元年、慶長二年の両度亘り、実に元帥として出陣し、大に明軍と戦つて功をたて

凱旋后は豊臣家の五家老の重祇に進んだ。レカレ慶長五年九月十五日関ヶ原の戦いに徳川家
康を向ふに廻して石田三成等と共に豊臣家復興のため戦つた。秀家は山内行長と中興部に布陣し、
奪戦したが山内早川秀秋の叛逆で敵將福島正則の精銳に撃破されて敗走した。秀家は故秀吉
の浩恩に報いようと死を誓つたが、老臣明石全登は「君公は諸將に号令する御身であるから、たとえ
大老奉行のすべてが關東方に降つたとはいへ、君公は独り危難に屈せず、豊臣家を擁護する計を
たて、もれ志を得ざれば關山城によりて天下の兵を愛けて、後を死するとも違はな、し」と諫めたので、秀家
は戰場を遁れ、近江の國、伊吹山深く落ちたのである。全登は主君を逃れしめて關山城に帰つて
再起を計らんとしたが、既に徳川方の手中に帰し、同五年十月五日、山内早川秀秋が城主に任命されて、こ
とは、人まりにも急変な局面であつた。關山の城下は町民をあげて名狀すべからざる大混亂をワレ
たことと相像される。

西軍の驍將として一万二千余の將兵を指揮して奮戦した秀家も惨敗后家臣の進せ藤三左衛門、黒田
勘十郎のただ一人を従えて伊吹山の山路深く迷ひ込んだ。当時の文献に
「この夜は美濃國鞆川の谷の岩隈に一夜を明かし、翌朝山中をさまよひ、樹立六七本ある岩
高のまつわりたる隠家のような所へ、中納言殿(秀家)を隠し、具足は脱ぎ捨て、肌帷子一つに九月
旬にはすでに山中寒く、中納言殿は水を呑みたくとおおせられ、水を汲むべきものなり、三左衛門
は谷間へ下りて、水はあれども汲むべきものなり、何とぞ致すべきと、見廻しければ、人を討ちて力を
さし紙三三枚づつを集めて水を、したして考うせたり」。翌十六日道を尋ねて、いくうちに白樺村の村民天
野五郎右衛門という者、落人を討取り、武器道具を剥ぎ取らんと槍を提げて来るに出遇ふ。この五郎
右衛門といふ者、秀家卿に出遇ひ、見てもかにも唯人にあらず、なにとなく痛まされ心となりて涙を流し何
方へ落ちさせ給ふや、道を知らしめんとす。五郎右衛門の顔さきを見るに、いかにも人を助け、べきよ
うなれば、よろしき様に計らはれた。と頼みければ、心得たりとて牛馬の通るべき道ならぬは、北月
に負ひて急ぐ道すから分捕のため御人どもが走りよりて剥ぎ取り、協め取らんとよりくるものを「知
人なれば許させ候へ」と辯舌をつくり、鰐の口を免れる心地して、その日の暮方、白樺村へ着く。五郎
右衛門は心易く思ひ、賤しき家に隠栖す。歌に
山の端の月は昔に女はらぬど、我が身の程は面影もなし

さしに今とは思ふ秋山の蓬が下に虫鳴く

ここに滞在すること数日、創痍を癒せしが、徳川方の捜索を以て、秀家は五郎右衛門の言に
従ひ、有馬湯治客の姿に身をまね、加馬籠に乗り、大坂天王路に着き、夜は紡糸大坂の屋敷
に入りぬ。すむにこの在の人は思はざりし夫君は、不意の帰館に奥方は五郎右衛門に、懐しの涙を
へず、黄金十枚、小袖五重、引出物せらる。しかれども身を休めることも叶はず、大坂天満橋よ
り川舩に乗り、瀬戸内海を下り、薩摩の島津家に身を托せらる」とあり。

島津家は大隅の國、牛根の里という所に新邸を構へて、ここに住まはせた。進藤三右衛門は慶長
五年十月下旬に秀家が薩摩に落ち延びたことを見定め、秀家の佩ていた鳥飼圓分の脇差を
推して大坂にある李多上野介を訪ね、主公は伊吹山に隠栖中に、この脇差をもつて自害せられた。この
脇差はかつて家康が所望の名刀なる故に、献上せ奉ると申し入れて、秀家の自及を信せしめたという。
慶長六年五月に薩摩から秀家女、その旧臣難波助右衛門李経に寄せた書翰に

今度我々身上儀に付て 不顧一命山中江被罪哉 其以何方々難堪所
付之儀奉公之儀 誠以満足之至不浅候 我々身上成立候はば 其方
事一々どの身体に可相計候 今度奉公軽重無忘却候 向右も我々身
上之儀 諸事無油断 其心遣肝要候
五月朔日 秀家 (花押)

我々心中申置候間宜様に其心得たのみ入候 以上
難波助右衛門殿

この書翰によつて秀家の心事の一斑を付度し得るものである。難波助右衛門の系統は
詳かでないが、おそらく備中難波系の人と考えられる。助右衛門は関ヶ原
の決戦には参加してゐないが、旧恩を感じ主君の安否を氣づかす切か
伊吹山中へ馳せ参じた豪士と思はれる。天下の大勢はすでに徳川氏に帰し
秀家も素志を貫徹する余地はなく、ついに佛道に入り剃髪して林復と号し
た。同年十二月に島津家久は大坂にのぼり、家康に謁してここの顛末を述

べ秀家の罪を謝し助命運動した。家康は死一等を宥めて駿河の國久能山に
滞めしこと三年。同十一年四月四日、三十四歳の時に流罪の刑名によつて
主従十三人と共に秀家は渡辺織部に警固され、島もかまゆぬ伊豆の八丈
島へ流謫された。「関ヶ原物語」の一節に

此島は唐土(異國)へは近く、日本には遠くと云ふ。哀れなる哉、秀家は此の島は硫黄島とも又俊寛
僧都左遷した鬼界ヶ島とも云ふ鬼の住んだ末々なれば、男女の姿も異様にして、眼老り、言語
は雷の如く、五穀の類もなく、ただ畜類の住家と聞き給ひ、胸室がり、目もくらみて蒼海に身を沈めんと
思ひ給ふに、聞きしにまさり、この島の女房は髪は長々とし、色は白く、形こまやみに眉は多く、揚貴妃本子夫
人(揚貴妃は唐の玄宗王の寵妃にして絶世の美人という。初め長子昇王の妃であつたが、玄宗の愛妃武惠妃
が死ぬると、玄宗は揚貴妃を自分の寵妃にした。玄宗は六十歳に近く、妃は廿二歳であつた)は、さぞ知らず、日本
にては見ることもなき美人たちなり。日本の女人は白粉口紅を塗り、歯は黒く染め、當時女性は鉄を酒
にて浸して液をつくり、歯を黒く染める風習がある。その形を飾るに、この島の女は生れつき其まゝの姿にて
美しき、いん方なし」と書してゐる。秀家は島に着いて實際に美人揃の姿をみて讚嘆した。流罪の身
とは、縁分心の和らぎを得たことであらう。その外宇喜多秀家記、若穂集、前田家雜録、浮田
由緒古記、などあるが、省略し、ただ宇喜多秀家の筆記による一部分を載す。

寛永の末期に備前牛窓の廻漕店、西大寺湊屋の持船で、利吉というものが國の産物を舟に積んで江
戸へ向ふ途中、暴風のため針路を誤つて伊豆の八丈島へ着いた。荒波の打寄り、密教の間に年令八十歳
位と思はれる老翁が釣りを垂れ、この老翁が舟人に、その方は何國のものかと尋ねた。舟人は備前
のものであると、いふと、備前と聞けばなつかしい。我も生國は備前岡山である。いま國の大字の名はなに
いふかと、問ふたので、松平新太郎と申す方である。と答へると、松平ではわからぬ。望名はなにかと、
その義は知らない。というので、しからば定紋はどのようなかと、問はれたので、定紋は舞蝶である。と答へた
さすれば中納言秀秋は去つて池田三左衛門の御子孫であらう。また城の西外廓に堀を掘られたか、といふ
れた。堀はある。というので、いまは城地は益堅固になつたであらうなと、備前のことについで尋ね、両眼に涙を浮
べ歎息して、たといふ。この事は舟人が帰國して語つたもので、老翁は瘦せ衰えて鶴髪は糸の如く乱れ、その底には
炯眼するどく、睥睨する状は恰も仙人の如く、気高さがあつたといふ。紡れもなくこれが秀家の晩年の悲

傍な姿とみつけられる。レハレ秀家は敗北の痛手を蒙り、人間同志の争いによって盛衰を生ずることの愚を悟り、鳥むかよの伊豆の孤島とはい元安住の地と定め、榮庵を築いて、ここに平和の世界をみだしたのみ知れない。五十年の久し、歳月を心静かに過ごし、明暦元年十月二十日(一六五五)八十三歳の高齡で屍を八丈島の土に埋めたのである。

法諡 尊老院殿秀月久福大居士

「八丈島流人存亡覚帳」に在る流罪者の一行を記している。

△ 前田家の記録に秀家以下主従十三名の流罪人の中にはまだララ若、女性も交つてゐた。秀家の嫡男孫九郎秀高、次男小平治秀雄の二人とも、その生母は実家なる加賀国金沢の前田利常の許に引き離された。この時次男坊の乳母アイは母子の生別の悲劇をみるに忍びず、遂に我子沢橋兵大夫を遺して秀家に御供した。

△ 浮田中納言殿 明暦元(一六五五)年十月二十日薨北八十三才 宗福寺及長樂寺過去帳云、宇喜多中納言秀

家卿 法名 尊老院殿 秀月久福大居士

御同人御子息 同孫九郎殿 慶安元(一六五〇)年八月十八日薨北五十八才 過去帳云ウキタ侍従

孫九郎秀高 法名 秀源院殿 浮雲居士

右同断 同小平治殿 明暦三丁酉年三月六日薨北六十才 過去帳云小平治五乃継

浮田次兵衛 元和五己未年十月十七日薨北行年不知 長樂寺過去帳云ウキタ久福下男治兵衛

田口大郎右衛門 寛永二十癸未年六月十六日薨北行年不知 長樂寺過去帳云ウキタ大郎右衛門法名

寺尾久七 寛永十癸酉年八月廿二日薨北行年不知 長樂寺過去帳云ウキタ久七郎法名内蔵信士

村田助六 高治元(一六五〇)年十月廿三日薨北八十六才 長樂寺過去帳云久福家老ウキタ助六法名道珍

半三郎 信士(加賀前田家より一門に隨從せしめた医師道珍者、一門尊敬して家老と呼ぶ)

寛永九年七月廿三日薨北、行年不知 長樂寺過去帳云半三郎法名浄本信士

御中納 彌助 寛永七癸卯年十月廿五日薨北行年不知 長樂寺過去帳云彌助法名 海雲信士

九

△ 同断 市若 北去の節及行年不知 貞享元年改云市若六十七年以前薨北仕候日不詳 長樂寺過去帳云、市若法名 善心信士

浮田治兵衛下人若若 寛永七癸卯年八月九日薨北行年不知 長樂寺過去帳云若若、法名 常香信士

浮田小平治乳人アイ 寛永四丁卯年薨北日行年不知 長樂寺過去帳云安比法名 寿林信女

アイ下女 トラ 寛永三丙寅年二月廿一日薨北五十七才 長樂寺過去帳云トラ法名 妙庵信女

△ 徳川三代將軍家老の没後幕府は関ヶ原の役并に大段の役に連坐した流罪者及び遁走中の武士、并に大名の子孫に対して特赦の内報があり、宇喜多一門へも同様の沙汰が傳へられたが、これに従はず、其の何れかの御赦の事があつたが、八丈島に所得があつて、頼つて帰らなかつた。浮田氏の末葉は十二家にわかれたという。レハレ徳川氏も滅び、明治聖代となつて、朝政は一新して、明治三年四月十六日大政官の命で二百六十四年の長、歳月を経て一門は赦免された。この時一門八才七十五名の男女は加賀藩主前田氏の好意により、東京市北豊島郡(いまの板橋町字平尾)にあつた下屋敷に住宅を新築して住まはせたが、明治八年になつて八丈島に帰るものもあつた。三才だけ止まつて士族に列せられたという。

△ 浮田久三郎 浮田孫九郎 浮田半平

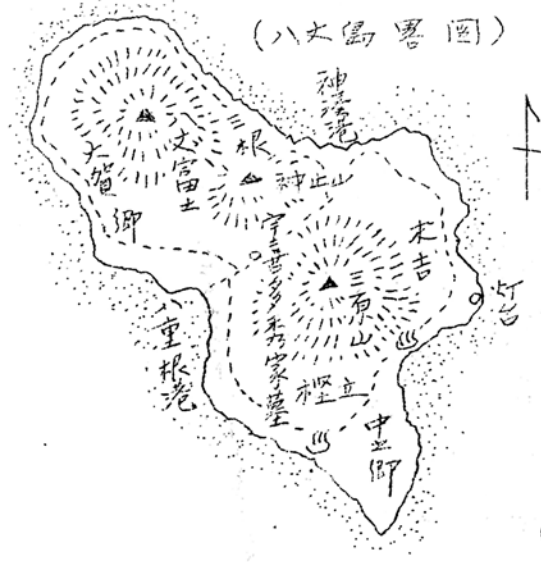
△ 秀家の本像にフッて

元禄十一年に八丈島に遠島された流罪者で、日老御抱えの大佛師、法橋民部が羽織を着、帽子を被つた角帯端座で、六十歳以上にみえる瘦姿の本像を彫み、永年菩提寺の宗福寺へ安置してゐたが、文政年中に当時の住持日景が、日蓮宗の像を浄土宗の寺へ置くことを厭ひ、当時流囚人の日蓮信者の思置屋源次というものに請へた。源次は高祖と稱して、尊信してゐたが、間もなく源次は赦免になつたので、後方の流僧の昇殿に譲り、またそれが日蓮宗の日上人に傳へたのである。日上人は慶應三丁卯年、大賀郷に住してゐた、武州日暮里村(白鳥)妙隆寺本妙院の住持にして、靈体の胎中に宇喜多があることを訴へ、座下の埋本を見出されて、宇喜多に胎内に秀家の本像、三社の誂宜と三代目の宇喜多秀正の天和元年(一六六〇)に書きたるに、家、秀高、秀正三代の和歌と秀親の死去した年月と法名を記したものが、紐めてあつたという。宇喜多直家は、畢生の努力を發揮して、備前の大守となり、その子秀家に至つて、宇喜多氏の興隆をなせとげたと、いえよう。レハレそのみげには、戸川

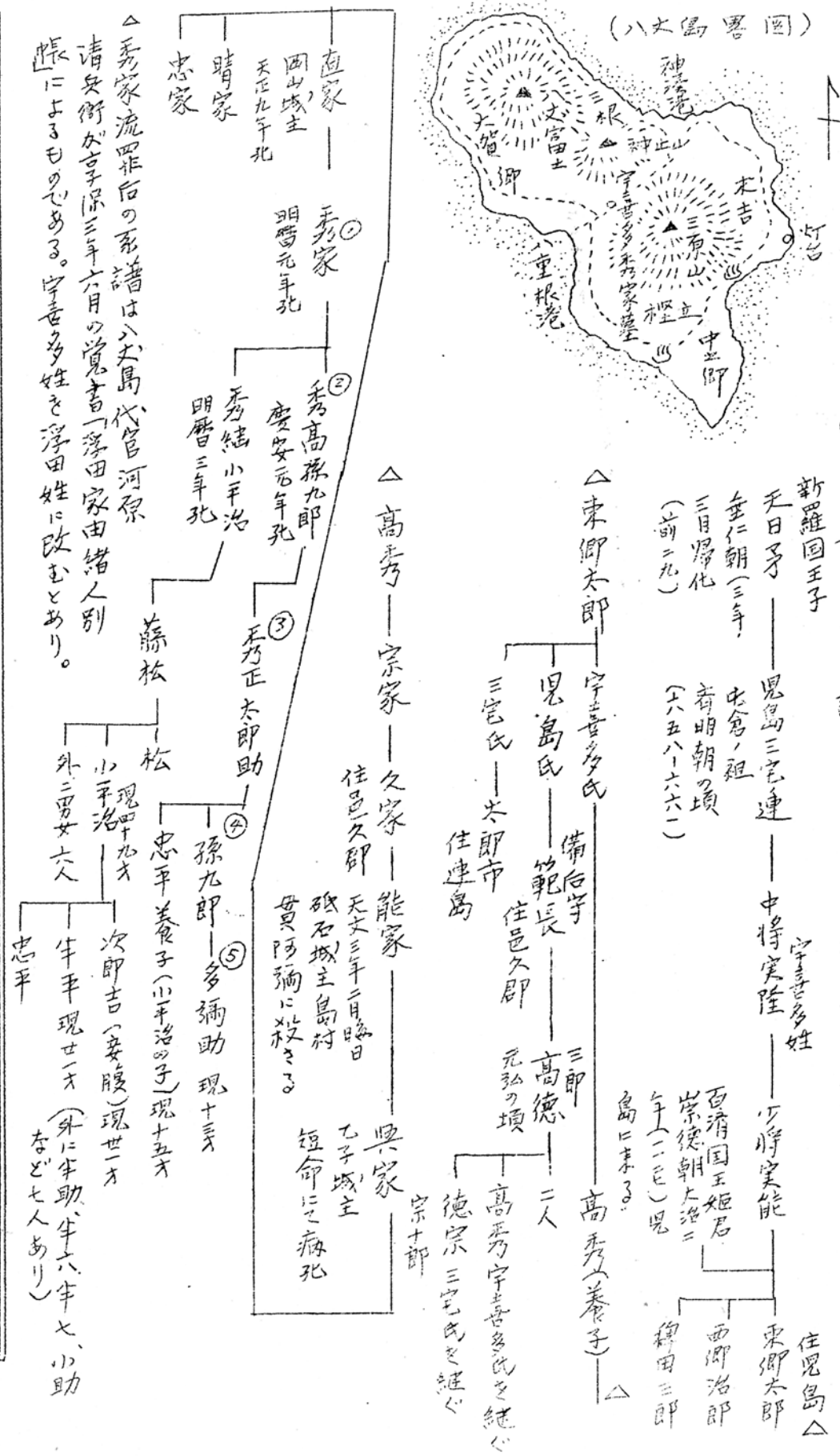
△

因、花房、明石等の智謀に勝れた老臣が輔佐していったことは見逃すことの出来な事案である。この老臣等は秀家の世代となり、常に主従との間に意見を異にし、内訌が絶えなかつたよである。元來秀家は生れながらにして困若の勞を知らず、幼少から秀吉に従ふて立身し五大老にまで累進したのである。一説には秀家の生母は容姿艶麗にして寡婦になつてから秀吉の寵幸を得たので、その疵謨によるといはれてゐるが、豊臣家の重要な地位を占めていたことから考へれば、あながち凡庸な人物ではなかつたと思はれるが、部下を統率して中くだけの力量に缺けていたのである。惜むらくは朝鮮より帰陣して大身となり、漸く奢侈に流れたので、その結果國の財政に行詰り、さては社寺の領地を削り、或は没収するなどの擧に出で國政を顧みなかつたので、戸川、岡、花房等はしばしばその非を諷き諫言する處があつたが聞き容れず、却つて排斥するかの態度がみえたので、ついに袖を連ねて國外へ逃げ去つたのである。しかれ秀家は秀吉が死に瀕んで嫡子秀頼がまだ幼少であつたので、後事を託さるた遺言を堅く守り、恩義を重んずる確固不拔の精神は關ヶ原の激戦で豊臣家再興のためによく戦つたが武運は拙なく午前八時から午後一時まで僅々五時間ほどにして勝敗は決したのである。宇喜多氏の滅亡はこの惨敗が最大原因になつてゐることは間違ないが、前に述べたようにすでに領民の間には怨嗟の聲が廣まつており、まして敗残の身で領土備前に歸つて果して再興の望みがあるだらうか。秀家は一縷の望みを抱いて島津氏を頼つて薩摩落ちしたが、それもならず。因業とあきらめて伊豆の孤島八丈島に朽ち果たしたのである。

八丈島は關ヶ原の役後二百五十年風を千八百余人漂流者だ、この島へ流されたといふ、秀家は此の流人の第一号といはれてゐる。島は八丈富士八五四米と三原山七百六米の二つの山があり、その間のくぐられた所に苔蒸した秀家の墓石がある。妻を思ひ、子を思ひ、女身の不運を歎いて孤島の土に骨を埋めた流刑者や娘



破れてこの島に終つた漂流者のためにつたれた多くの有縁無縁の墓は感慨の深いものがある。



土木、建設業

有限 所司組

取締役社長 所司利男

吉備町下撫川電 三〇九番

硬質塩化ビニル 各種製品販売

平松工業株式会社

岡山営業所

吉備町東町 電四三二番